

Title	東西文化の融合(内藤智秀著, 六盟館刊)
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.2 (1943. 2) ,p.133(275)- 134(276)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430200-0134">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430200-0134</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が中世都市の研究につけ加へぬと思はれる。ヨーロッパに比べて自治都市が單に未發達であつたと云はれるだけではなく、その未發達の歴史的な理由が探究される必要があるだらう。そしてヨーロッパ中世都市の具體的研究が高村象平、増田四郎、の諸氏によつて著しく進められてゐる、且我が中世史研究の進展又著しい今日それは必ずしもはや不可能ではないと思はれる。そしてその探究こそ思ふに中世都市研究の最も基本的な課題になるのではなからうか。著者が何時か問題を一層根底的に追求してわれくに啓發を與へられんことを切望して止まぬ。妄評多謝。（渡邊基）

### トウーキュードイデース「歴史」（青木嚴譯）

ヘーロドトスが「歴史の父」と呼ばれると同じ意味でトウーキュードイデースもまた「歴史の父」である。兩者が取り扱つてゐる題材の時代と性質とに一桁の相異がある様に、この二人の歴史家の本質にも業績にも當然の相異がある。前者は世界史を轉換させ様な大事件を前にして壯年期の激動たるギリシア精神をそのまま華麗な筆力を縱横に振つて古今東西の世界を論破してゐるのであるが、後者はギリシアの「大」を既に知りつくしたギリシアの天才が必然的に起つて来るギリシア世界の崩壊を前にしてその事件の成り立ちを観じ、その事件を生み出す原因を解き、その事件を飽くまでも追及してそのうちにひそむ事件の意義を捕へんがために深い洞察を試みてゐるのである。前者が雄大な華やかな歴史であるのに比して、後者は深い人知のひらめきを集積した哲

學的著作である。兩者ともにその取り扱ふ題材に對する態度に於てそれぞれその題材の最も要求する表現を與へることが、即ちギリシア史上に於て殆んど時を同じうしてこの二人の「歴史の父」を生み出すことになつた根本的な事情であらうと推察される。先にヘーロドトスの歴史を譯出して學界の好評を博された青木嚴氏が今日またトウーキュードイデースの歴史（上巻）を譯述されたことは（下巻も既に譯了の由、上梓の日も遠からぬことと拜察される）何よりも先づ本邦古典學界のために欣快至極のことと存ぜられるのである。

ギリシアを論ずる書は多い。しかしそれ等の書物のうちどれだけが吾人に本當のギリシアを教へてくれるであらうか。少くともこの兩譯は吾人に生々としたギリシア精神の諸相を直接に物語つてくれる。とりわけトウーキュードイデースの描いた世界はギリシア文化の酣な時代であつて其處に展開する事實はみな悲劇的な意義に富み、その事實に内在する壯大と哀感とが深い彼の洞察を透して劇的に描かれてゐるだけに我々の如き歴史學徒にとつては特に學ぶべきものが多いのではないかと推察される。

なほ青木氏は卷末にベリー教授の名著「古代ギリシア史家」に據つてトウーキュードイデースの生涯と業績について簡単に親切な一文を草せられてゐる。（近山金次、昭十七、十二、二日記）

### 東西文化の融合（内藤智秀著）

著者が序文に書かれてゐる様に、久しきに亘つて西亞東歐の文

化的盛衰に就いて凝視して來た間に、折に觸れ時に當つて書かれたものの中、興味中心の三十六篇だけ集めて一冊として公にせられたものである。

史論の卷の第二に、文化の融合なる題目の下に、簡単ではあるが著者の過去三十五年間の研究の對象が述べられてゐる。著者は今より三十五年前に東西文化の融合の歴史的變遷を考慮し、爾來最も東西文化の接觸せる近東又はペルカン地方を研究せられた。

その研究の結果——勿論その一部分ではあるが——を表現せる本書が東西文化の融合なる題名を附せられてゐるのも當然の事と思ふ。

内容は折に觸れて新聞や雑誌に書かれたもの、又は講演せられたものの速記などであり、回教の卷を除いては幾分雜然たる感を受けるのは止むを得ざる事であらう。又大東亞戰爭勃發後の今日の情勢からすれば、幾分實情の異なる點もあるが、之も又止むを得ざることである。

### 日歐通交史

(幸田成友著  
岩波書店發行)

こそ數年來上梓の擧ることを伺つてその實現の一目も速かならんことを待望してゐた幸田博士の「日歐通交史」が過日世に送り出された。博士自身は序文において「本書は初期日歐外交史の入門と稱すべきである」と謙遜されてゐるが、それは素より當らない。その内容は、室町幕府末期における葡萄牙人の初來に筆を起し、江戸幕府初期に彼等の來朝が嚴禁され和蘭人のみが長崎出島で交易を許されるに至る約百年に亘つての詳細な日歐通交史に關する「研究書」である。

本書については既に諸雑誌や新聞やに多くの紹介乃至評言が掲載されてゐるのであつて、今更私の如きが燕辭をつらねて書評をシブール名稱考、日本人の旅行者が殆ど歩かざる地を紹介せる黒海岸、コーカサス、西アジアの旅行記、西歐の知識により在來曖昧に説明せられたラマザーン、祈禱作法、教義等を明確に紹介せられた回教の各論文等、西亞東歐の文化的實情を學ぶためには、容易に他の書に於て發見し能はざる多くの内容を盛つて居り、且つ西亞の旅行記、西亞の文化的本質、回教は著者の最も研

究せられた所であり、蓋し最も權威ある名論と考へられ、東洋史や西洋史を學ぶものは勿論、廣く東西文化の接觸について學ぶものには是非一讀をすすめたいものである。又史論に於ても、時代の推移に深く注視せられてゐる著者の論文が、一般の歴史家に對して多くの指針を與へてくれるものであると考へる。(田中荆三)